

満洲語属格標識の ni という綴りについて

早田 清冷

hayatag@gmail.com

キーワード： 古典満洲語 属格 借用語 軟口蓋鼻音

要旨

満洲語の属格標識-iは、17世紀の半ばでは、ngで終わる借用語に後続する際に-iと書かれずにniと書かれることが一般的である。本稿はこのng niという満洲文字連続の音声について考察する。当時の文字表記において、固有語でもngnVとnVは正確に区別されているから、このng niという綴りは17世紀半ばの満洲語話者によって（文字通りに）[ɲni]と発音されていたと考えられる。また、本稿は、[ɲni]という形から[nɲi]という形が生じた可能性も指摘する。

1. はじめに

本稿¹は、古典満洲語（以下「満洲語」と呼ぶ）の文字表記において ni と書かれた格標識について考察するものである。満洲語の属格（および具格の）標識-iは、17世紀の比較的早い時期の表記を除くと、満洲文字表記の ng で終わる語の後では、多くの場合、ni と綴られる。ng ([ŋ]~[N]) で終わる語は、明らかな漢語からの借用語が多いが、本稿における主張は、この表記が定着して間もない時期である17世紀半ばの満洲語話者は、このng ni という綴りを文字通りに[nɲi]と発音していた、というものである。またこのような発音になった原因についても考察を行う。17世紀半ばの満洲語の表記の資料として『満文三國志』（1650年序）を用いる。

2. 格標識-iの満洲文字による綴り

満洲語の属格標識-iは、17世紀の早い時期（詳細は第4節参照）の表記ではngで終わる単語の後でも、それ以外の単語の後でもほぼ-iと書かれていたが、やがてngで終わる単語に後続する時のみniと書くというのが、ほぼ、習慣となった。

¹ 本稿は筆者の博士論文の一部（早田2015b: 43-49）を大幅に改めたものである。議論の前提になる事項の説明を補充し、データの誤りが判明した部分を修正し、さらに、niと表記された格標識について、音声、音韻上の実態に関わる考察を加えた。この研究は日本学術振興会の科研費（24・5815 および 16K16819）の支援を受けている。本稿に関わる部分において、博士論文審査の過程で主査の林徹教授（東京大学）をはじめとする審査員の先生方にさまざまな助言をいただいた。特に、格標識初頭の鼻音の問題に関して、田窪行則教授（現国立国語研究所所長、当時京都大学）、小林正人准教授（東京大学）に貴重なコメントをいただいた。この場を借りて感謝し上げる。本稿で用いた『満文三國志』の電子化テキストデータは全24巻中の約1巻分を筆者が、他は早田輝洋氏が入力したものである。検索の一部で、キーワード前後文脈付き索引の作成に KIS (株) 漢字情報サービス、木村展幸氏の開発による『KIS 日本語解析システム』 KisKwic for Windows を使用した。

しかしながら、普段文献を読んでいる満洲語学や東洋史学の研究者は規範的な記述と異なる例外をしばしば目にしている。特に18世紀に成立した文献でもngの後でniと書かずに-iと書いた例が多々あることは特によく知られているように感じる。1955年の時点で『世界言語概説 下』において満洲語を概説した記事(山本1955: 520・521の脚注)では『満文老檔』(18世紀乾隆年間)の表記の調査に基づいて、-iがng以外の綴りで終わる語に後続する場合については「名詞に関する限り、末綴-ngを有する語に連結する場合の他は、すべて(-)iしか現れない。」(p. 521, 原文旧字体)とするとともに、ngの後では-iもniも現れるという記述をしている。

また、資料によっては、nの後でniと書いた例も(吉池2008に挙げられている「天聰汗錢」の例、早田輝洋2012:102-104で挙げられている文献中の例等)少数ながら存在している。

このngの後の格標識-iの綴りが-iからniへ変遷していく様子は、早田輝洋(2012: 96-101)に詳しく、本稿で扱う『満文三国志』(1650年序)でも、18世紀に成立した資料でも、ngの後の-iが少数ではあるが出現していることも示されている。

3. 問題の所在

格標識-iは、17世紀の初期の表記を除くと、文字表記上ngで終わる語(その殆どが明らかな漢語からの借用語である)の後では、多くの場合、niと綴られる。満洲語話者は時代が下るにしたがって漢語に堪能になっていくが、17世紀の初期においては満洲語と最も接触があった言語はモンゴル語であるから、漢語からの借用語の語末に/ŋ/という音素があった可能性はあまり高くない。また、オノマトペでも、語末にngが出現することが知られているが、オノマトペの場合は、ngの他にも固有語の語末に現れない子音文字が多々現れる。このような表記の語が単独で発音された時に、文字通りに語末子音が発音されたと安易に想定はできない。

満洲文字の正書法でniという格標識の表記が定着した時期である17世紀半ばにおいても、借用語の語末のngという部分の発音自体、いかなるものであったのか、ng niが本当に文字通りに[nni]と発音されていたのか、という点で従来の研究における意見が分かれている。これが本稿で扱う第一の問題である。また、[nni]と実際に発音されていたとすると、それはいかにして生じたかという点も本稿で扱う問題である。

3.1 ng ni の発音を[nni]~[ni]とするもの

格標識-iがngの後でのみniと綴られるようになったことについて、中村(2008: 3)で試みられている説明では、原因を2点挙げている。1点目として、満洲語では、借用語末のngはnと同様に[n]として実現した可能性が高いとする。格標識が後続した時にngが[n]と発音された可能性は考慮していない。ngに格標識-iが後続した時の音声はnに格標識-iが後続した時の音声と同じであるという考えである。そして2点目として、モンゴル文語においてngで終わる語にモンゴル語の格標識iやunが後続すると、それぞれgi, gunとgを補って読まれていたという。満洲文字でもngの後で-iと書くと、モンゴル文語に慣れた読み手がこの-iをgiと誤読する恐れがあるという考えである。以上の2点により、満洲文字表記で、ngの後でのみ格標識-iをniと書き、-iとは書か

ない習慣であるのは、ng([n]と発音)の後の格標識-iをモンゴル文語に慣れた者に、giと誤読するのを避け、正しく[ni]と読ませるためであるとする。

この主張に従うとng niの発音は[nni]または[ni]ということになる。[nni]と[ni]のどちらであっても、借用語末のngの発音は一貫して[n]であるから語幹末の[n]という音声は直接の原因でniと綴られる音形が当時の音声言語に実際に生じたとは考えない立場である。

3.2 規則 -i → ni を認めるもの

この、ngの後のniという綴りについて、音声言語に起きた言語変化の結果であるという考えもある。早田輝洋(2012)は「-i→ni規則が起り【略】音声として[ni]で実現しそのまま続いたように思われる」(p. 107, 原文旧字体)と述べる。純粹な正書法上の工夫ではなくngの後で格標識-iが[ni]で実現する規則が生じたという考えである。「n挿入規則」(p. 108, 原文旧字体)とされているが、元々満洲語には無かった語末のngの後で何故そのような規則が生じたのかは述べられていない。

4 niという表記の普及時期

まず、このniという綴りの普及時期は重要である。確かに満洲族はもともと、書き言葉としてモンゴル文語を用いていたから、かつてはモンゴル文語に慣れた者が多かったはずである。しかし、モンゴル文語に慣れた満洲語の書記が一番多かった17世紀初めの、最も古い満文資料『満文原檔』(1607～1636年の記事があり、内訳は、ほぼ前半の5冊がヌルハチ時代、後半の5冊がホンタイジ時代、最後の2冊が満洲文字改革以降)では格標識-iはngで終わる語の後でも、-iと綴られていたことが指摘されている。

属格標識は、ng以外に続く時は-iでngに続く時はniであると一般に記述されているが、原檔満洲語では第V冊(ヌルハチ時代の終わり)までは、そういう規則性は見られない。ここではng -i連続295例に対してng ni 連続は19例である。(早田輝洋2012: 96, 原文旧字体)

続いて、早田輝洋(2012: 96・97)では、『満文原檔』の天聰元年(1627年)以降の記事、すなわち、ヌルハチの次のホンタイジの時代になってからの記事では、ngの後でのniの表記が目立って増加すること、天聰6年(1632年)以降の2冊、すなわち、満洲文字改革後のものではngの後でのniの表記が用いられる率が90%を超えることも示されている。

ngの後の格標識-iがniと綴られるのが、格標識-iを含む音節を正しく読ませるためだけの、正書法上の工夫(-iと書くともモンゴル文語に慣れた者にはgiのように読まれてしまうから、これを避ける目的の表記)に過ぎないとすると、初期の満洲語資料でこそngの後でniと綴ることが必要である。ところが、ngの後でniと綴ることが定着するのはホンタイジ時代である。満洲文字が使用開始されたのは1599年とされているから、30年近い時間がたってようやく採用されているのであって、モンゴル文字を使用していた満洲人が誤読をするのを避けるための

正書法上の工夫を導入するには、時期が遅すぎる。

5. 固有語中のngn

この問題を考察する上での重要な手がかりとして、本稿では満洲語の固有語においても、ngが語中でnの前であれば存在しているという事実を挙げたい。(1), (2)のとおり、満洲語では語中でngnとnが、単語毎に、はっきり書き分けられており表記の混乱は知られていない。

(1) n(gn)iyeの例 niyengniyeri 「春」 eniye 「母」

(2) n(gn)iyaの例 niongniyaha 「雁 (などの鳥)」 funiyagan 「度量」, aniya 「年」

これらの書き分けから満洲語には語中でngnとnの対立はあることがわかる。語中で対立が無いならば、共にnと表記すれば良く、ngnという綴り²が採用されるとは思えない。この表記が始まった時期にはngnとnの対立があったと考えるべきである。『満文三國志』中のこれらの語の綴りを見るとniyengniyeriの50例に対してniyeniyeri, niyenniyeriは共に無く、niongniyahaの7例に対してnioniyaha, nionniyahaは共に無い。eniyeの47例に対してengniye, enniyeは共に無く、funiyaganの9例に対してfungniyagan, funniyaganは共に無く、aniyaの566例に対してangniya, anniyaは共に無い。表記の混乱は見られない。

格標識-iをngの後でniと書いて続けて読むと、満洲語話者は直前のngを語中と同様に発音できるはずである。したがって、(仮に、ngの後のniが自然な音変化の結果生じたものでない)かなり人為的な工夫であったとしても、niは-iを[ni]と読ませるためというよりも、格標識-iが後続した時だけでも-iの前のngを正しく[ŋ]と満洲語話者に発音させるための工夫として機能することがわかる。

清朝(後金)が支配地域を広げるにつれ、地名や人名で語末の[n]と[ŋ]を区別しなければならぬ状況が増していった。満洲語話者が一貫してこれら[n]と[ŋ]を区別せずに、格標識が後続した時ですら共に[n]と発音し、ng+iもn+iも両方とも[nni] (または[ni])の様に発音し続けたとは考え難い。子音で始まる音節を補えば語幹末のnとngを発音し分けることは可能なのである。

6. 自然な変化 ŋgi > ŋni の可能性

格標識-iのniという綴りについては、前節で指摘した通り、人為的な発音上の工夫が当時の音声言語で用いられる事がしばしばあり、それが書き言葉にも採用されていた可能性がまず考

² 参考までに、満洲語の方言と言える言語である現代シベ語を参照すると、山本(1969)による20世紀のシベ語の発音では満洲語のniyengniyeriは[n(i)ɛŋniɛrj] (p.135)で、niongniyahaは[njŋŋax] (p.109)である。実際に満洲文字のngnの部分でnの前のngが[ŋ]と発音されている。

えられる。借用語の語幹末の ng を、格標識-i が続いた時に正しく [ŋ] と発音するために、ng + -i を [ŋni] の様に発音するというものである。しかし、そうだとでも何故その [ŋ] の後の -i の形が gi ではなくて ni なのか、という問題がある。借用語末の ng が音素/ŋ/として定着しており、既に語末で [ŋ] と発音されていて、それが原因で自然な発話において [ni] という音節が [ŋ] に続けて発音されていた可能性も検討しなければならない。

6.1 もともと [ŋŋi] であった可能性はある

通時的に ng + -i が ng ni [ŋni] という形になる一つ前の段階として、[nɪi] ではなく [ŋŋi] という段階があった可能性が高いことを指摘したい。先ほど述べたとおり、満洲語の格標識-i は、満洲文字の使用が開始されてからしばらくは、ng で終わる語の後でも -i と綴られていた。この ng -i という綴りで ng を [ŋ] と発音しようとする、[ŋ.i] はまず不可能である。[ŋ.i] のように母音で始まる音節を、他の音節に続けて発音することは、満洲語ではありえなかったと考えられる。むしろ、借用語末の音節末の [ŋ] に後続する形で似たような音声を続けるのが自然である。具体的には [ŋgi] または [ŋŋi] という発音ならば可能であろう。両方とも発音可能であったならば、[ŋŋi] の方が望ましいことは言うまでもない。満洲語の音節頭に ng という文字が書かれることは無いが、これは音節頭に [ŋ] という音声が出現できないということまでは表していない。固有語（例えば、inenggi 「日」）の語末に現れうる文字連続 nggi は ŋ による順行同化で [ŋŋi] と発音された可能性³が十分ある。

6.2 格標識の独立性

ただし、nggi で終わる固有語の語末で [ŋŋi] と発音するのに比べると、格標識-i が後続した借用語末の ng を、常に [ŋŋ] と発音し続けるのは困難が伴ったのではないだろうか。文献中の満洲文字の綴りを見ると、満洲語の格標識は、語幹に続けて、形態素境界が発音にほぼ影響を与えないで発音される場合だけでなく、語幹からある程度分離して発音されることもあったと考えられるからである。

今回問題の -i を含む満洲語の格標識が附属語であるのか、接尾辞であるのかという問題は様々な観点から議論⁴がすでに行われている。ただし、本質的にどちらであるかとは別に、音声に関してのみ注目すると、満洲語文献を読む者がすぐに目にする事実として、格標識は先行する単語の一部であるかのような表記をされる場合と、先行する単語とは別の単語であるかのように表記される場合との両方があることがよく知られている。

特に、母音 i で終わる語が、明らかに後続の名詞の所有者であり、属格でなければならない場合においては、この母音 i で終わる語の後に、格標識-i が綴られる場合と綴られない場合と

³ 満洲語の固有語にある語中の ngg という綴りにおいて ng の後の g が（はっきりそうであるとも、そうでないとも言えないが）鼻音化して ([ŋŋ] などの音で) 発音されていた可能性が考えられるという立場は早田輝洋(2008b: 28, 29)にも示されている。

⁴ 詳細は早田輝洋(2008a)参照。

がある。同じ「司馬懿 (syma・i) の兵 (cooha)」という表現でも、『満文三国志』の 20 巻 67 丁表には syma・i -i cooha と書かれ、syma・i「司馬懿」の後に格標識-i の音形が表記されているが、同じ資料の 20 巻 69 丁表では syma・i cooha と書かれ、格標識-i をあらわす表記は無い。先行する名詞が i 以外の音で終わっている場合は、所有者を表す名詞は必ず属格標識-i (ni という綴りを含む) を伴う。母音 i で終わる単語でのみ、このようなことが起こるのは、格標識-i が (本質的に附属語であるか接尾辞であるかはともかく、音声的には) 直前の単語に続けて一単語のように発話される場合と、ある程度形態素境界の切れ目を発音に反映して発話される場合と、両方あったことを示唆するものである。

借用語末の ng と後続の格標識-i とを続けて、一単語のように発音した時に、借用語の語幹末の ng を[nŋ]と発音するだけなら、ng + -i の発音は[nŋi]でも[nɲi]でも問題が無い。しかし、[nŋ]は満洲語で自立語や独立性の高い附属語の語頭に立てる鼻音ではないから、[nŋi]の発音は常に格標識を続けて発音しなければ実現できない不自然なものである。借用語末の[nŋ]という音声が多くの話者の自然な発話に受け入れられるとともに、後続の格標識-i を含む音節の音形は[nŋi]から[ni]に変化したのではないだろうか。

7. 表記の揺れ

『満文三国志』の段階でも、ngの後でのみのniという習慣は徹底されていない。少数だが例外が見られる。ngで終わる語の後で-iと書かれた例が14例あり、nで終わる語の後でもniと書かれた例が4例ある (表 1, 2 参照)。⁵ ngで終わる語の後で-iと書かれた例が14例であるのに対してngで終わる語の後でniと書かれた例は4017例である。nで終わる語の後でniと書かれた例が4例であるのに対してnで終わる語の後で-iと書かれた例はおよそ一万数千例ある。

⁵ 早田清冷(2015a: 9)で筆者が検索した時点では、それぞれ 16 例、5 例としたが、改めて原文を確認したところ電子化したデータに誤りがあった。

表 1 ng で終わる語の後で-i と書かれた例

用例	意味	出現箇所
guwan・gung -i	關公の	06 卷 027 表
ioi・k'ang -i	餘杭の	08 卷 063 裏
genggiyen gung -i	明公の ⁶	08 卷 072 裏
jang・sung -i	張松の	12 卷 086 裏
uling -i	武陵の	15 卷 066 裏
fan・ceng -i	樊城の	15 卷 069 裏
siyan・fung -i	先鋒の	15 卷 070 裏
guwan・ping -i	關平の	15 卷 076 裏
fan・ceng -i	樊城の	15 卷 079 裏
lioi・meng -i	呂蒙の	16 卷 012 裏
sioi・šeng -i	徐盛の	18 卷 016 表
g'ao・ding -i	高定の	18 卷 024 裏
dung -i	洞の	18 卷 060 裏
siliyang -i	西涼の	19 卷 021 裏

表 2 n で終わる語の後で ni と書かれた例

用例	意味	出現箇所
fon ni	時の	05 卷 059 裏
hecen ni	城の	09 卷 010 裏
sirdan ni	矢弾の	15 卷 078 裏
nan・jivün ni	南郡の	15 卷 102 表

『満文三国志』において、ngの後でのみniと綴る規則の例外は、割合としては極々僅かなものであり、少なくとも正書法上はngの後でのみniと綴るのが習慣になっているようである。しかし、他の音で終わる普通名詞の後でこのような混乱は全く見つかっていない。このようなngの後でのみniという習慣に対する例外的な綴りについて、早田清冷(2015a: 9)では脚注で、一部の満洲語話者は、語末においてnとŋの音韻論的対立が無かったことが示唆されるという解釈を述べた。しかし、むしろ本稿の議論を踏まえるとngと後続の格標識-iの部分の音声的実現が[ŋni]～[ŋŋi]で揺れていたのであり、[ŋni]はng niと表記され、[ŋŋi]はng -iと表記された可能性の方が高い。この表記揺れは音声上の現象⁷を反映したものにに見える。『満文三国志』が書かれた17

⁶ 漢語「明公」は「明」の部分は満洲語の固有語 genggiyen「明るい」と訳されている。

⁷ 中村(2008: 3)はnで終わる語に後続する-iがniと書かれた少数の綴りについては、発音を反映した例外的な表記であるとする。

世紀半ばの時期で、当時の音声言語において、*ni*が基底形の音素表記からして異なる異形態/*ni*/として完全に定着していたとまでは言いきれない。異形態/*ni*/が完全に定着していたならば、*[ŋji]*という音声での実現は無くなっているはずである。満洲語が話し言葉として衰退した時期の*ng-i*という綴りは単なる誤記かもしれないが、この時代は満洲語が北京でも盛んに話されていた点に注意されたい。

8. 結論

満洲語の語中では綴りの上で *ngn* と *n* の書き分けが行われており、*n* の前では *ng* を *[ŋ]* と発音出来たと考えられる。すなわち *ng* の後に *ni* という形があれば満洲語話者は語幹末の *ng* を正しく *[ŋ]* と発音できたと考えられる。従って、*ng* の後で *-i* を *ni* と綴ることは、モンゴル文語に慣れた者に *-i* の音節を *[ni]* と発音させる事だけが目的の、正書法上の工夫であると考えべきではない。

この *ng ni* という綴りの原因として、第一に考えられるのは、格標識 *-i* が続いた時に借用語の語幹末 *ng* を、正しく *[ŋ]* と発音するために、*ng+i* を *[ŋni]* の様に発音する人為的な発音上の工夫が当時の音声言語にあったというものである。この場合は、そのような発音上の工夫が書き言葉にも採用されていたということになる。しかし、この解釈では、*[ŋ]* の後は *ni* でなくて *gi* でもよかつたはずであるから、なぜ *ni* なのかは説明できない。

第二に格標識が後続しない時でも、語末 *ng* の *[ŋ]* という発音がかなり定着していた可能性も考えられる。格標識が音声上は完全な一単語というよりは、ある程度は境界を反映した発音をされることがあり、*ŋji* が *ŋni* という形に変化した可能性を指摘できる。

いずれにせよ *ng ni* という連続は文字通りに *[ŋni]* と発音されていたのであって、当時の音声言語で起きていた現象を直接反映した綴りであると考えるのが妥当である。*ng* の後でのみ *ni* と綴る習慣には、17世紀半ばの時点でも割合としては極々僅かな例外があり、*ng+i* の音声的实现において若干の揺れ、*[ŋni]~[ŋji]*、があった可能性がある。

参考文献

- 早田清冷(2015a)「古典満洲語の「同格の属格」について」『言語研究』147: 7-30, 日本言語学会。
早田清冷(2015b)「古典満洲語属格標識-iの研究」博士論文, 東京大学。
早田輝洋(2008a)「満洲語の格標識は附属語か接辞か」『語学教育フォーラム第16号 言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』1-9, 大東文化大学語学教育研究所。
早田輝洋(2008b)「満洲語の音節構造」『語学教育フォーラム第16号 言語の研究—ユーラシア諸言語からの視座—』21-51, 大東文化大学語学教育研究所。
早田輝洋(2012)「満洲語のn~∅交替の史的概観」*Altai hakpo*, 22: 93-110, The Altaic Society of Korea。
中村雅之(2008)「満洲語属格助詞「i/ni」について」『KOTONOHA』70: 1-3。
(<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf3/nakamura70.pdf>のPDF版, 2015年1月2日閲覧)

- 山本謙吾(1955)「満洲語文語形態論」『世界言語概説・下巻』489-536, 東京: 研究社.
山本謙吾(1969)『満洲語口語基礎語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
吉池孝一(2008)「天聰汗錢の満文属格語尾について」『KOTONOHA』68: 14-16.
(<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/pdf3/yoshiike68.pdf> のPDF版, 2015年1月2日閲覧)

『満文三国志』 ilan gurun -i bithe, 順治7(1650)年序, パリ Bibliothèque Nationale de France,
Mandchou 120 および 121.

Manchu Genitive Marker Spelled *ni*

Hayata, Suzushi

Keywords: Classical Manchu, genitive, loanword, velar nasal

Abstract

In mid-17th century Manchu, the genitive case marker *-i*, when attached to loan words ending in *ng*, was usually written as *ni*, rather than *-i*. This paper is an attempt to determine how this Manchu letter sequence was pronounced. I argue that it was pronounced as it was spelled, drawing on the observation that *ngnV* was correctly distinguished from *nV* in native words in the written language at the time. It is also suggested that the form [ɲni] is likely to have been derived from [ɲŋi].

(はやた・すずし)